

## 縦に分けられていることの弊害

障害種別を超えた情報発信と相互の学び合いを

増田 一世

最近、猛省することしばしである。端的に言えば、学習が足りないということだ。本号の緊急特集でも明らかなように、狭い分野のことだけ見ている、方向性は描けない。精神障害分野で長年活動してきた、他の障害の分野のこと、他の疾病の人たちのこと、障害者福祉のことも、それ以外のことも本当に知らないあと実感することばかりだ。

私は、今年度さいたま市の障害者施策推進協議会の委員として、障害者の相談支援システムをテーマにしたワーキンググループのまとめ役を担うことになった。もう1つのワーキンググループ、全体的な障害者施策の進行管理については、今号に登場願った齋藤なを子さんがまとめ役で進んできた。この2つのグループが本協議会のほかに2回ずつ会合をもった。その中で、同じ市内なのに互いの現状を知らなかったことを確認した。話し合いを重ねていくうちに、精神障害の分野がいかにか立ち遅れているかを他の委員の人たちが理解し、難病や精神などの施策の遅れている分野に目を向けていかななくてはという発言も出るようになった。同じさいたま市内で、やどかりの里は35年近く活動を続けてきたのに、他の障害の関係者にきちんと伝えてこなかったことを痛感した。情報を発信することを生業にしながらも、私の意識は、精神保健福祉という狭い枠の中だったのだなあと、これもまた反省であった。

先日は、埼玉県内の知的障害者の施設職員

の研修会に招かれた。知的障害の人たちの施設に精神障害を併せ持った方たちがいて、どのように関わっていったらいいのか模索していた。具体的な実践例の発表に基づき議論されたが、話を聞きながら、精神障害が特別なことのように捉えられがちだと感じた。そして、障害が法律や制度によって縦に分けられていることの弊害を感じた。障害の違いを超えて日常的に交流していれば、もっと安心して重複の障害を持った方と関わるのではないかと感じた。ここでも互いに学び合うことが大切だと感じて帰ってきた。

障害をどのように考えるかというときに、メディカルモデルは、個人の問題を社会に合わそうとする考え方であり、ソーシャルモデルでは、社会の排他的な態度を問題として、差別を受ける可能性があるから障害と見るという考え方であると聞いた。後者の考え方でいけば、誰もが障害を持つ可能性がある。特別な人たちへの特別の支援という考え方で障害者施策を考えるのではなく、誰もが障害を持つ可能性があり、差別される可能性があるとすれば、障害者施策の考え方はずいぶん変わっていくのではないだろうか。他人事ではなく、自らの問題として障害者施策を考えるようになれば、国や自治体の予算の配分について、討論の中身が変わっていくのではないだろうか。そうした意識変革も学習の積み重ねの中にあるのではなからうかと、再び学習の大切さを強く思うのだった。